

長く医者をしてもらって、色々苦い経験もする。つい、「いろいろ患者はたぬ、診たくな」「なごう、弱気」になったりもする。

34歳のF子さん。転んで後ろ頭を強く打った。運ばれた病院でCT（コンピュータ断層撮影）の検査をして「脳振盪」と診断された。が、1週間経っても、頭痛やらしきは良くならない。いや、もう3週間というのに、逆に症状は強くなる。よく眠れず、イライラして疲れやすいと深刻である。

だが、診察をしても、MRI（磁気共鳴画像）の検査をしても、異常はみつからないのだ。Fさんが心配する慢性硬膜下血腫や脳挫傷はみられない。閉塞性血管障害や低髄液圧症候群なども否定できる。しかし、Fさんは、毎日のように受診し、訴えを繰り返す。医者は、動揺する。ひよつとするし、だいぶ前に経験した「脳振盪後症候群」の、あのやっかいな患者さんと同じ経過を辿るのではなかつたか。

脳振盪後症候群とは、受傷後3カ月を超えても頑固な不定愁訴が続くものだ。頭

痛、めまい、疲労感、過敏、睡眠障害、情緒障害、人格障害および無関心の3症候のうち3症候以上が持続する状態とされている。訴えは、理屈の合わない自覚症状がほとんどだ。その発生機序は、よく分かっていない。だから、治療法には決まったものはない。いやな予感がする。が、ここでオタオタしては、医者がすたる。

一般に、患者さんの脳損傷の不安は、医者が思っている以上に強いようだ。不安を抑うつが、本来の症状を強くして悪循環を生むのだろうか。となれば、やることはひとつ。まず、「脳振盪は必ず回復する」と繰り返して説明し、Fさんに納得してもらうことだ。もちろん、愚直な医者の力が及ばなければ、心療内科や精神科の先生方を頼るしかあるまい。

（石黒修三＝いしほくしゅうさん）脳神経

外科医…3/4北國新聞掲載）